



# 図書館だより

2017.4  
No. 27

長崎県立大学佐世保校附属図書館

〒858-8580 佐世保市川下町123  
TEL 0956-47-2191 (代表)  
<http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

## 活字に親しもう

太田博道

(学長)

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。おめでたいのですが、しばらくはその達成感を味わいたい、という余裕はありません。直ちにギヤーチェンジしなければなりません。皆さんがこれから生きていく時代は、あるいは日本の状況は、これまで経験したことのないものになると考える方が良いでしょう。そのような何が起こるかよく分からない、過去の経験がそのままではあまり役に立たない時代を逞しく生きるためには、早い時期から、即ち今から、様々な力を付けて備える必要があります。

日本の人口は、外国からの移民を想定しない場合には、今後減り続けます。今のまま推移すると、皆さんが働く時代はずっと減り続けるでしょう。「減り続ける」こと自体が望ましくないこととイコールではありません。しかし、ではどうするかということを考えなければならない訳ですが、この類のモデルが過去の日本にはありません。したがって、皆で考えなければならないことになります。考えるだけでなく、実行しなければなりません。そういう力が皆さんには求められているということです。

はじめに「外国からの移民を想定しない場合には」と条件をつけましたが、この条件はおそらくは現実的ではありません。現在、日本での「外国人」の居住者は100万人を超えたようですが、この数字は今後大きくなっていくと考えられます。日本は海に囲まれ、過去には鎖国の経験もある国で、外国人や外国文化の受け入れには慣れていませんが、今後は新しい文化の醸

成が求められるのではないかと思います。逆に日本から出ていく必要もこれまでより多くなると予想されます。コミュニケーションの手段について、言葉だけでなく、文化も含めて様々なことを学ぶ必要があるでしょう。

人工知能 (Artificial Intelligence) の発達もどこまで行くのか、どこまで日常生活に入り込んでくるのか、予想し難いものがあります。しかし、運転手のいない車が一般道で実験を行っている現実があり、世界企業の会計処理は世界中のブランチのデータを一箇所に集めてコンピュータで処理していると聞きます。まだ暫くは人には敵わないだろうと言われていた囲碁のソフトが、一流棋士に勝つようになりました。これはコンピュータが自ら学習することができるようになったことが大きな要因です。大学の研究室でPCが使われ始めてからせいぜい30年、携帯電話がポピュラーになったのは20年くらい前ではないかと思います。IT関連の発達のスピードはまだ衰えず、この先どうなるのか見当が付きません。皆さんは「見当が付きません」とは言って呑気に構えてはおれないので、しっかり付き合い、活用しなければなりません。

このような時代に的確に対応するためには、広い範囲のことを相当頑張って勉強しなければならないことは容易に理解できると思います。情報は印刷されたものにせよ、インターネットの活用にしる、基本的には活字を通して得られます。音声や人とのお付き合いを通して得られる情報もありますが、多くは活字による情報ではないでしょうか。日本語だけでなく、英語に馴染めばインターネットの有効性は格段に上がります。しかし、インターネットによる情報は玉石混交ですから気をつけなければなりません。図書館にある活字情報は膨大なものがあります

から、全てに接することは事実上無理ですが、自分の興味や目的に沿うものを見つけ、是非利用して頂きたいと思います。若い時に時間を惜

しんで勉強しないと後で後悔することになります。

## 幅広い分野の本を読もう

石田和彦

(附属図書館館長)

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。この「図書館だより」が刊行される頃には、多くの新入生の皆さんが、既に図書館の利用方法や、本・文献の探し方に等に関するガイダンスを受けておられることと思います。それでもまだよくわからない点や、うまく行かない点、あるいはもう一歩進んだ利用方法、等については、遠慮なく図書館のスタッフに訊いて頂き、附属図書館を十分に活用して有意義な大学生活を送って頂きたいと思います。

また、2～4年生の在学生の皆さんは、今後、演習や卒論作成等で、今まで以上に資料や文献の検索、「調べ物」等の機会が増えるはずですが。こうした作業には、図書館の利用が不可欠ですので、これまであまり利用して来なかった方も、これからは積極的に図書館を活用して、勉学の成果を挙げて頂きたいと思います。

これまでも様々な機会に繰り返し述べてきたことですが、インターネットで何でも簡単に検索できる世の中になっても、そこには、本当の情報に混ざって、間違いや意図的な虚偽・不正、さらには、敢えて誤った方向へ誘導しようとする悪意のある情報などが溢れています。皆さんが、授業や演習、卒業論文に関連して何かを調べる際には、様々な情報が本当であるか否かを確かめるために、原典や真偽の評価が確立された資料・文献等に当たる必要があります。言うまでもなく、図書館はそのために不可欠なツールです。

しかし、皆さんが何年かの後に社会に出てからに比べれば、遥かに時間的にゆとりのある大

学生時代です。単に、4年間、専門である経済や経営の勉強をし、その分野の本をたくさん読んだ、あるいは、経済や経営関連の資料・文献に多数あたった、というだけでは、何か物足りない気がしないでしょうか。経済学や経営学の中では、経済主体の経済行動、あるいは、企業活動は、多くの場合、モデル化・抽象化された形で扱われます。このこと自体は、経済学や経営学が学問として成立し、学生の皆さんに教えられるために避けられないことですが、経済行動や企業活動を行うのは、あくまでも「人間」です。経済的側面以外の人間の行動（多分、ウェイト的には、その方が大きい）にも関心を向けて、経済・経営以外の社会科学・人文科学の本、あるいは、文学・小説等を多数読んでみることは、皆さんの「人間」行動に関する理解を広げてくれるでしょう。そのことは、きっと、専門である経済・経営分野にも、より深い理解・洞察をもたらしてくれるはずですが、取りあえずはそんな「実利」を期待しなくても、読むこと自体が楽しくなれば、それだけ皆さんの人生が豊かになります。

一方で、経済や企業活動は、「技術」に支えられています。古くは蒸気機関、近年ではITの例を出すまでもなく、基盤となっている技術が変化すれば、経済や企業もそれに伴い変わって行くはずですし、技術の変化に適應できない企業は淘汰されてしまうでしょう。「技術」のベースは自然科学です。ところが、いわゆる「文系」の人間の多くは、自然科学に苦手意識を持つことが多く、技術の裏側にある自然科学の原理等については、良く分からないからと放置して、ブラックボックス化してしまいがちです。佐世保校の学生の皆さんも、多くは「文系」で、こうした傾向がしばしば見受けられます。しかし、自分たちの経済行動や企業活動を支え

ている技術を、実はよく分からないまま、その上に乗って日々の生活や仕事を続けている状況は、何となく、「気持ちが悪い」感じがしないでしょうか。例えば、身近な生活の中でも、スマホやケータイはなぜ繋がるのか、パソコンはどのように莫大な情報を処理しているのか、自動車はどう動くのか、等々、少しでもその原理が分っていれば、もっと気持ちよく使えそうな気がします。そのためには、自然科学の本も、「自分は文系だからどうせよくわからない」などと敬遠せずに、是非、たくさん読んで頂きたいと思います。

もちろん、皆さんの専門である経済や経営と同じレベルで、他分野の専門書や文献・資料を読むことは難しいでしょう。しかし、世の中には、やさしい解説書や入門書といったものが多数出版されています。特に最近では、「新書ブーム」などと言われることもあるように、各出版社から手軽な新書が多数出版され。その中には、様々な分野の良質な入門書や解説書が含まれています。こうした新書を初め、多くの入門書や解説書は、一般の読者、あるいは仕事で忙しくて読書に長い時間をかけるゆとりのない社会人等

を想定して書かれていますので、一定の知的訓練を経た（経ているはずの・・・）大学生の皆さんであれば、たとえ、専門外、あるいは苦手意識のある自然科学分野であったとしても、それほど困難なく読むことが出来るものと思います。

附属図書館には、経済や経営の専門書・文献・資料等だけでなく、このような幅広い分野の本が豊富に揃っています。借り出して自宅等で読んで頂いてもいいですし、授業と授業の間や、早く授業が終わってアルバイト等もない時間などに、1～2時間程度図書館を訪問して、面白そうな本を探して、見つけたらそのまま閲覧スペースで読むのもいいと思います。新書や入門書、解説書の類は、あるいは文学・小説等の本は、学術専門書に比べれば安価であるとは言え、多くの本を読もうとすれば、すべてを自分で購入することは、特に学生の皆さんには難しいでしょう。しかし、図書館をフルに活用すれば、難なく、幅広い分野の多数の本に接することが出来ます。それは、皆さんの大学生活だけでなく、その先の人生をもっと知的に豊かなものにしてくれるでしょう。皆さんの来館を、心よりお待ちしております。

## 「入門書」の効用

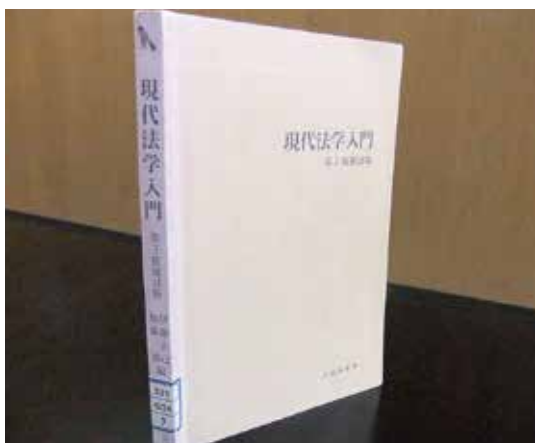
板垣 太郎

(経営学科講師)

『図書館だより』の原稿執筆を引き受けた時、まず考えたのは、自分にとって図書館とはどんな場所だったかということでした。だいぶ昔になりますが、法学部在学中に大学院への進学を決意し、しばらくしてから入学（入院？）試験にも合格し、さあ研究だ！と意気込んだところ、その入試は10月頃に行われたため、4月の入学までだいぶ間が空いておりました。この期間は大学院入学後のための勉強や研究にあてる期間であることが一般的だと思いますが、私の場合も、専攻する科目（商法学）の関係上、民法

や商法の学習のほか、とくに語学（ドイツ語）の力を身につけることが急務であったため、図書館で関連する本を読みながら、文字どおり「独学」の毎日を送っていました。

ところが、本学のみじめな学生と違い、集中



方に欠けることが多かった当時の私は、休憩時間と称しては、図書館の本棚にある本を適当に手にとって読むことがしばしばありました。読んだ本は文庫や新書の類が中心ですが、テーマもバラバラで、まさに乱読という言葉がぴったりでした。しかし、そうした読書の中でとくに強く思い出されるのは、さまざまな「法学」の入門書を読んで受けた衝撃でした。

進学後は商法学の研究をすることになっていましたから、今のうちに法学の基本をおさらいしようと思って読んだのですが、「これだけ勉強してきたのだから、どれもこれも簡単に読破できるだろう」と甘く考えて読んでいたことは否定できません。しかし、そうした理解は大きな間違いであったことにすぐ気づくことになります。

たしかに内容は法学部に入りたての頃より理解できましたが、それ以上に、かつて法学部の講義で入門書を読んだ時とは明らかに違う、法律の「体系」というものを、明確なイメージとともに把握できるようになったことに驚きました。まるで頂上の見えない山道をせせと上っていたところ、ふと後ろを振り返った時に、それまでの道、ふもとの風景、遠くの海などが一気に見え、そのすべての位置関係が把握できたかのような気がしました。

たとえば、伊藤正巳・加藤一郎編『現代法学入門』（有斐閣）は、1964年に初版が発行されて以来、近年にいたるまで版が重ねられてきた

名著です。その「序説」、「法とは何か」、「法の適用」などの部分は、法律の勉強を始めたばかりの人が読む場合、具体的なイメージをつかみながら体系的に理解することは難しいでしょう。しかし、法律学をある程度勉強してから読むと、そうしたレベルにおいて明確に理解できると思います。また、私が初めて講師として法学を講義する際に使用した、浅木慎一『商法探訪』（第2版、信山社、2010年）という本は、そのはしがきで、商法という分野の門前を訪れてもらう「門前書」としてはいますが、民法、商法、手形法や会社法にいたるまで、法体系を常に意識しつつそれぞれの基礎を学ぶことができる良書です。こうしたことも、ひととおり勉強した後で通読することで、改めて理解できるようになると思います。そして、そのような理解からは、専門的かつ高度な研究に対しても絶大な効果が得られます。

入門書から得られる「体系」等の理解とその効用は、法学にかぎらず、さまざまな分野にもあてはまると思います。難しい専門書と比較すると、入門書は野暮ったい教習車のように思われるかもしれませんが、でも、卒業間近の学生などで、昔講義で使った入門書があるという人は、ぜひそれをもう一度手にとって眺めてみてください。つまらない教習車だと思っていた車が実は精巧につくり込まれたスーパーカーで、自分はその性能をどこまで引き出せていたのかと考えるのではないのでしょうか。

## 「最大にして最長の商人 ・都市共同体」の歴史

-ドランジェ著『ハンザ 12-17世紀』の刊行によせて-

谷 澤 毅

(国際経営学科教授)

少し前に、記者の一人として出版に関わった一冊を紹介させていただきたい。サブタイトルにもあるフィリップ・ドランジェ著（高橋理監

訳）『ハンザ 12-17世紀』（みすず書房、2016年）がそれである。白を基調としたシンプルな装丁、みすず書房の出版だとすぐわかるこの本で扱われているのは「ハンザ」についてである。

「ハンザ」とはなにか。これについて一見識のある方は、歴史の専門家を除けば、それほど多くはないかと思われる。高校生の時に世界史を学んだ経験をお持ちの方のなかには、「ハンザ同盟」という言葉を聞いたことがあるという方もおられるかもしれない。そう、本書で扱っ



ているのは、このハンザ同盟の誕生から衰退までのおよそ500年にわたる歴史である。

ハンザとは、中世後期から近世にかけて北方ヨーロッ

パに存在した商人や都市の連合体のことを言う。おもにドイツの商人や都市から成り立っていたので、本国ドイツではドイツ・ハンザと呼ぶのが一般的である。タイトルにある「最大にして最長の商人・都市共同体」とのフレーズは、本書の帯に記されている文章からとった。ハンザについて勉強してきた者として、この文言は「なるほど」と思わせるものがある。たしかに、ハンザは数百年にわたりヨーロッパの北の海を中心に交易を支配してきたからである。

しかし、ハンザは「最大にして最長の交易共同体」であったかもしれないが、決して「最強」ではなかった。著者も言うように、むしろ組織としては脆弱であり、一時期を除けば、「同盟」という言葉から連想されるような強固な組織ではなかったというのが実態に近い。同盟であればその結成と解散の時期がはっきりしているのがふつうである。ところが、ハンザはいったいつ誕生していつ消滅したか、確定することはできない。また、ハンザに属している都市をハンザ都市というが、ハンザ都市がいくつあったのか、これについても定説がない。つまりはっきりとはわからないのである。

このような組織としてのつかみどころのなさ、これまでハンザの欠点と見なされてきた。全体集会であるハンザ総会への参加率も、リュベックなどの主要都市を除けば、いたって低く、組織としてはなんとなく危なっかしいという印象を抱かせる存在でもあった。ハンザとは、

「当時の法曹家が当惑するような奇妙な勢力」だったのである。

しかし、見方を変えれば、このようにある種あいまいで柔軟な組織だったからこそ、ハンザは長続きしたと考えることもできるだろう。ケルンやブレーメンのように、著名な都市でも不祥事を起こせば除名の対象となったとはいえ、一定期間が過ぎればまた復帰することができた。なんとも緩やかな、フレキシブルな組織だったと感嘆せざるをえない。国家ではない、都市や地域を主体とするこれからの国際的な連携組織を考える際に、ハンザの事例は、このような組織のあり方を考案するうえで大きなヒントとなるのではないだろうか。

著者のフィリップ・ドラランジェ(1904～99年)は、フランス・アルザス出身の歴史学者。この訳書の原著がフランス語で刊行されたのは1964年のことである。刊行以来、本書は最もすぐれたハンザの通史として認められ、その評価は現在に至るまで揺らいでいない。ドイツ語訳、英訳も出版されている。かくして、この『ハンザ』は本国ドイツの関連本を差し置いて高い評価を得るに至ったのであるが、じつは、著者のドラランジェにとって本書はハンザに関するデビュー作にほかならなかった。監訳者の高橋理氏の知るところによれば、それまでのドラランジェはドイツ中世農業史の研究で知られ、ハンザに関する著作は一つもなかったらしい。本書刊行後も、彼のハンザに関する業績としてはわずか一本の論文が知られるだけだという。

にもかかわらず、本書がハンザの通史として最も高い評価を得た理由として、学問的な水準を保ちながらハンザを多面的に具体的に描き出した点、そしてなにより周辺の国や地域との関係に配慮してハンザの盛衰を国際的視野のもとで浮き彫りとした点を挙げることができるだろう。実際、一頃までのドイツ本国におけるハンザ史研究は、「あとがき」で高橋氏も指摘するように、ハンザを「ドイツ史上の一現象」として理解する見方が強かった。ドイツ史的、一国

史的な観点からハンザを捉えようとする傾向が目立っていたのである。しかし、海を主要な活動の舞台とした交易共同体であるからこそ、ハンザは昨今はやりのグローバルヒストリーや海域史の研究と親和性が高いと考えられる。この

ような研究の広がり可能性としてはらむハンザの全体像を一望のもとに提示してくれる最も優れた通史として、ドランジェの本書は位置づけることができるのである。

## 異文化の目で 日本を見る楽しさ

佐野 真由子

(公共政策学科教授)

わたしがはじめて上陸した日は、休日であった。多くの人々が、明らかに最上の服装をして外にでており、人に出会うたびにまじめにいていねいなあいさつを交わしていた。かれらは、両手をひざのところまでおろし、身をかがめ、息を押し殺したような感じで、口上をのべる。その身のかがめ方の深さと敬意を表する程度とが密接な関係にあることは、一見してわかる……家々の戸口のまえには、はでな色の着物をきせられた小さな人形のついた旗やのぼりが竿につるされて、ぶらぶらゆれている。それは、一年に一回、三日間にわたって息子や娘たちの誕生を祝って行われる一大祝典、すなわち「祭」であった。……

商店からはかなり商工業が行われていることがうかがわれるし、広い道路にそって中心街の方へゆくと、その大半はりっぱな敷き石舗道になっている。いたるところで、半身または全身はだかの子供の群れが、つまらぬことでわいわい騒いでいるのに出くわす。それに、ほとんどの女は、すくなくともひとりの子供を胸に、そして往々にしてもひとりの子供を背中につれている。この人種が多産系であることは確実であって、まさしくここは子供の楽園だ。

ここに描かれているのは、安政6（1859）年5月、端午の節句を祝う長崎市中の情景である。

書き手は、イギリスの初代総領事として、開国間もない日本にやってきたラザフォード・オールコック。東シナ海から船で日本列島に到着すると、駐在地の江戸に向かう前に、長崎に寄港した。

オールコックはその後、3年の勤務を経て休暇のため本国に戻った折、書きためた原稿を大部の日本滞在記として出版した。原著は、*The capital of the Tycoon: A narrative of a three years' residence in Japan* (Alcock, Rutherford, London: Longman, Green, Longman, Roberts, & Green, 1863). 日本語訳は『大君の都』（山口光朔訳、岩波書店、1962年）として知られており、上の和文はそこから引用したものである。

前任者もおらず、何の前提知識もなく、日本語もわからないまま、遠い日本に派遣され、正真正銘、初めてその人々や風物に触れた第一日の印象として、皆さんはこの文章にどんな印象を持たれるだろう。端午の節句の詳細は少し間違っているかもしれないが、これがそのような日であることを見抜いた慧眼はもとより、まじの様子がいきいきと観察されていることに驚きはしないだろうか。

オールコックというこの人物を、私は大学生のときに恩師から教わり、彼を軸とした初期の日英外交が修士論文のテーマとなった。いまは彼の伝記を書いている。むろん、ここから発展した他のさまざまなテーマにも取り組んでいるが、オールコックはつねに私の原点である。上に紹介したのは『大君の都』のほんの一部だが、その全体には、鮮やかな第一印象に続き、彼が次第に日本の内情を知るにつれて鋭さを増していった観察の記録がちりばめられている。同時にその目線には、日本の文化をこよなく愛する

ようになった人ならではの温かさがある。

私がこの機会に皆さんにお勧めしたいのは、オールコックに限らず、このような、開国後早い時期の日本を内側から見つめる機会を持った外国人の滞在記である。事前に多くの情報が得られる現代と違い、じかに出会った異文化をそれぞれの個性が捉える様は、それ自体が読む者の文化観を刺激し、鍛えてくれる。むしろ、彼らの日本文化理解に違和感を持つ場合もあるだろう。そのときには、その感触を丁寧に掘り下げてみてほしい。さらには、当時の日本人にとっては当たり前で記録すら残っていない社会の慣習などが、詳細に説明されていることもある。そうした史料としても貴重な存在である。

今日ではこの種の著作の少なからぬものが翻訳され、しかも文庫本などの手軽な形で入手で

きる。ここでは、私がとくに心を打たれ、また楽しんで読んだ2点を挙げておくことにしよう。

1冊は、幕府が開いた長崎海軍伝習所の教官として、安政4（1857）年から2年間、勝海舟をはじめとする生徒たちと親密に交流し、のちオランダ海軍大臣となったカッテンディーケの『長崎海軍伝習所の日々』（水田信利訳、平凡社、1964年）。そしてもう1点は、明治8（1875）年に父親が商法の教授として招かれたのをきっかけに、14歳の少女としてアメリカから来日、急速な文明開化を遂げる東京で自身も大人になっていったクララ・ホイットニーが、明治20年までの日々を記録した『クララの明治日記』（一又民子他訳、中央公論社、1996年）である。ぜひ、手に取ってみていただきたい。

## 図書館は宝の山

芳賀普隆

（実践経済学科講師）

いつもリュックサックの中に何か本を入れていて、入っていないと何となく物足りない気分になる。その本の中身は、というと、時に専門書だったり、新書、文庫本など。バスや鉄道にどんなにたくさんの人が乗車していて喧騒の中にあっても、ずっと自分の世界に入り込んで本を読める時は幸せな気分になる。気分転換に池波正太郎や藤沢周平、葉室麟などの時代小説を読んで人情の機微に触れたり、市井の人々の生き様を感じることもある。

そんな本好きの私であるが、本との出会いは幼少の頃に遡る。年齢、学年が上がるにしたがって絵本の類から物語、伝記、推理小説、日本文学などに幅が広がっていった。特に歴史物と伝記は小学校中学年以降夢中になって読んだ。伝記の中には、牧野富太郎、北里柴三郎、キュリー夫人などのように、研究に一生を捧げた人々もいた。また、戦国大名や幕末の志士のような、

教科書によく出てくる歴史上の人物や物語もあったが、どのジャンルにせよ、予備知識も事前情報もないまま何となく手に取って、それで読んでいるうちに引き込まれる、ということも数多くあった。市内の図書館や区民センターの図書室に親に連れて行ってもらっただけでなく、小・中学校の図書室からも本を借りて読んでいた。特に小学生の自分にとって、図書館という場はまさに「居場所」だった。

高校の時は少し本を読む勢いが落ちてしまった。そして大学進学後はまだ将来のことが何も見えない状態であった。その時期には、図書館は「居場所」というよりも調べものなどで「利用する場」であった。

大学院に進学すると、大学院講義における報告準備や研究のために図書館に行くことが多くなった。蔵書数が多い大学だった上、附属図書館だけでなく各学部にも図書室があり、よく行った。大学院生の時に特に気に入っていた場所は図書館の書庫だった。特に修士課程院生時には、何時間も書庫にこもって、1つの雑誌を端から端までチェックしたり、著書や論文を探したことも度々であった。当時もOPACはあったし、

Cinii（国立情報学研究所）の論文検索も利用していたが、当該雑誌を実際に自分の目でみて、その前後の巻・号をチェックしているうちに、本来探す目的とは別の興味深い論文を探せることもあった。大学院のあった京都は酷暑と呼ばれるほど夏がものすごく蒸し暑く、屋外を歩いても頭がクラクラし、ボーっとしてしまいそうな厳しい気候であったが、夏場の図書館の書庫は少しひんやりしていて涼しく、居心地の良い場所であった。大学院生時代を通じて、その大学にすっかりお世話になったが、図書館はまさに「宝の山」だな、ということを実感した。

その後、いくつかの大学の研究員等を経験した後、昨年（2016年）4月に本学佐世保校に赴任した。特に研究者にとって図書館、書庫での文献探しは、「すぐ間近に手に取る所にはなかなかないもの」を探す「宝探し」感覚でもあることに変わりはない。

こうして現在に至っているが、社会科学の立場で、かつ学際的な環境分野の研究・教育に大学教員として携わるということは、幼少期には想像もつかないことであった。だが、今思えば、数多くの人々の出会いやご縁に加え、さまざまな読書体験の中でいつの間にか自然に導かれたのかもしれない、と本学に勤務して約1年が経ち、そう感じる。

最近図書館の文献検索がさらに便利かつ容易になり、研究・教育に携わる私だけでなく、学生の皆さんにとっても、レポート作成や講義の予習復習、自主的な調べ学習、ひいては卒業論文執筆の際、効率よい文献収集と情報整理が

求められている。また、パソコンのインターネットやスマートフォンを開けて検索エンジンにキーワードを打ち込めば、調べたい情報が膨大に出てくる時代になった。しかし、「便利」だけでなく本当にいいのかな、とふっと思うこともある。時にはふらっと無目的で図書館を訪れて、図書館で宝探しの旅に出かけてはどうだろう。もしかしたら、偶然見つけた本の出会いがその後の人生を変えるかもしれない。知らない文献に遭遇する喜びは私自身これからも大切にしていきたいと思う。

学問分野の枠にとらわれず、自然科学、歴史、経済学、哲学、文学、心理学、政治学など、いろいろなことに興味や関心を持ってほしい。そして、読書するだけでなく読後感をメモしたり自ら思索することにより、本を探して読むだけでなく、宝探しに出かけた皆さん自身が長崎県立大学の学生としてだけでなく、一人の人間として成長してほしいと思う。皆さん一人一人が長崎県立大学の宝なのだから。学生の皆さんにも、図書館で本を探し見つけ出すプロセスを大切に、宝探しをするワクワク感を是非体験してほしい、と切に願っている。



◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで（学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで）  
土曜日：午前9時～午後5時まで  
休館日：日曜日・祝祭日・開学記念日（6/4）

編集・発行責任／長崎県立大学佐世保校附属図書館運営委員会 発行日／2017年4月28日